



118号
2006/11/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
Eメールのアドレスが上記に変更になりました。



ゲレ先生の授業風景 (中国四川省甘孜藏族自治州理塘県にて [2004年8月]) 鈴木晋作撮影

「わんりい」118号の主な目次

北京雑感その⑨「北京の公園Ⅱ」	2
媛媛来信⑳「趙氏孤児」と蔵山(ツァンシャン)	3
「陝北女娃」⑬<彩虹>	4
「陝北女娃」⑭<苗苗>	4
中国を読む㉑「至福のとき」莫言中短編集	6
私の調べた四字熟語⑦ 朝三暮四	7
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	7
韓国・智異山に登る	8
「中国語で歌おう」11月の予定	9
私の四川省一人旅(序章)	12
アフリカとの出会い⑬「日本車天国」	13
YAPAHUWA(ヤーパフワ)遺跡	14
なぜ、私財を投じて—西村勝一氏を偲ぶ	15
「わんりい」掲示板	16

お出掛けください!!

第9回 町田発国際ボランティア祭
■ 2006 夢広場 ■

2006年11月4日(土) 10:00 ~ 16:00

於: 町の駅「ぼっぼ町田」 参加: 無料

JR横濱線ルミネ側改札口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分
町田東急デパート裏109ファッションビル裏通り(地図最終ページ)

✍ 夢広場祭絵画展

「町田にゆかりの現代中国人画家四人展」

11月3日~5日 11:00 ~ 18:00 (最終日: 16:00)

於: 街かどギャラリー (町田市原町田4-6-8)

📄 折って遊べる折り紙講習会

11月5日(13:00 ~ 15:00) 於: 上記同会場

講師: 小林慶子(日本折り紙協会会員)

主催: 2005夢広場実行委員会/共催: 財団法人町田市文化・国際交流財団
問合せ: 042-722-4260 2005夢広場実行委員会・町田国際交流センター

👉 詳細は最終ページをご覧ください。

蓮花池公園は、外側が公園らしくなくてびっくりしましたが、玉淵潭公園は、どの門前も、外側から既に公園のようで、ゆったりとしています。東側は、釣魚台に連なっていて、釣魚台の東側を走る道路、三里河路は、北の阜城門大街から南の復興門大街まで、道路そのものが公園のようです。夏の強い日差しの中でも、喜んで歩きたくなるような道です。

玉淵潭公園には、日中国交回復を記念して、田中角栄が贈った桜の木を中心とした、桜桃園があります。中国の方々の話によると、桜の花の最盛期には、歩くのが困難な程に、人々が集まるそうです。私が訪れた時は時期が遅く、花の印象は今一でしたが、この桜桃園へ行く道が素敵でした。池の中に延びた道を辿るのですが、両側の池の畔に柳の木が植わっていて、芽吹いて間もない新緑が風に揺れる中を歩くと、足が独りでにスキップを始めそうでした。

この公園のもう一つの売り物は、大きな池です。本当に街中かと思う程に大きな池があって、私が行った4年前には、人々が泳いでいました。泳ぐのには、ちょっと勇気が要るような水でしたが、10人くらいの人が泳いでいました。そういえば、以前は、あちこちの公園で、泳いでいる人々を見ましたが、最近はずっと見かけません。やはり規制が厳しくなっているのでしょうか。

この池は、公園の名の通り、玉淵潭と言いますが、どこでどう区切るのか、一部を八一湖と言い、そこから遊覧船が出て、北の頤和園まで1時間ほどの船旅が楽しめます。八一湖を出て西に向かい、丁度三環と四環の間にある、藍靛廠路という道に沿って北上します。途中で、紫竹院から出てくる水路と合流するのですが、その付近は遠大路と言い、最近大きなショッピングモールが出来て賑わっているところです。

因みに、このショッピングモールは、東洋一とかで、大きな商場が多い北京でも、一際大きなものです。規模も大きいのですが、売っている物のお値段も高級です。ここでの値段を見る限り、中国は物価が安い、とはとても言えません。それでも、大きな駐車場はいつもいっぱい、沢山の人が車で集まって来ています。車とお金がないと利用しづらい所ですが、利用者は確実に増えているそうです。でも、モダン過ぎて、高級すぎて、私には馴染まないショッピングモールです。

さて、船は、ショッピングモールを左手に見て、更に北北西へ進むと、間もなく、頤和園の南門に着きます。頤和園の入場料込みのチケットですと、門を入っ

て頤和園の池まで船で入れます。とは言っても、門を入ればすぐ船着場ですから降りなければなりません……。入場料の含まれていないチケットだと、南門の外で降ります。この門は、頤和園の裏門のようなものですから、ここから正門の方へ回るには、頤和園の外壁に沿って歩かなければなりません。頤和園の見学をしないのなら、南門の前に停留所があり、途中まで船のルートに戻って行く374路バスに乗って帰るのが良いでしょう。

頤和園南門の一つ手前のバス停は、六郎庄西口というのですが、3年ほど前に一度間違えて降りて、一停留所分歩いたことがありました。左に水路を見ながら歩くと、右側にはごく浅くて幅広い溝があって、溝の脇は、幅20メートル程にわたって、雑木林のようになって、道に沿っています。雑木林と言っても、木々は、背の高い立派な街路樹が多くて、その木立の間から、時々、広々として、ゴルフ場のようにグリーンで覆われたなだらかな起伏と、玉石を浅く敷き詰めた、人工のせせらぎのような水路が見えました。暫く行くと、自然を生かした釣堀があって、多くの人が釣り糸を垂れていました。キャンプ場の案内があったりして、人々の野外活動の中心のようでした。これが、万柳公園の西の端で、なかなか素敵な公園のように見えたが、入ってみる時間はありませんでした。

公園の外側の道は、3年前でさえ、右側に車がびっしり駐車して、定期バスが走りにくそうでした。今では、きっと道路の拡幅工事をして、雰囲気随分変わっていることでしょう。公園の周りにあった林のような木立はどうなったのでしょうか。もしかしたら、広い駐車場になっているかもしれません。

当時の道端は埃っぽくて、ごみもいっぱい捨ててあって、決して綺麗ではありませんでしたが、ごみさえなくなれば、高原の道のような雰囲気があって、なかなか捨てがたいものでした。あの道路の拡幅工事は必要ですが、スペースにゆとりがあるのですから、あの道端の雰囲気も少し残して欲しいと思うのは無理な相談でしょうね。私の乏しい見聞からも、中国の改良工事は、大規模で、思い切ったものが多く、幅1メートル程の線路際の道路が、道幅30メートルの大通りになっているのにびっくりした経験がありますから。

皆さんは、変わり行く北京がお好きですか？私は、正直なところ、あまり好きではありません。北京らしさがありませんから。

京劇に詳しい方はおそらく「趙氏孤児」という有名な演目をご存知でしょう。

「趙氏孤児」は史書の「史記 趙世家」などの典籍に記載された歴史事件からできた物語です。時代は春秋中期で、晋の国が舞台です。晋王の靈公は奸臣の屠岸賈トウアンジャの讒言ざんげんを聴いて、良臣の趙盾ジャオドゥンの一族を殺しました。

その災いから逃れることができたのは趙盾の妻・莊姫チュアンジイとその腹の胎児だけでした。後に莊姫が実家の晋の宮中で、男児を生んだと言うことを聞いた屠岸賈は、さまざまな手段を用いてその赤ちゃんを殺そうと企んでいました。それを知った医者チャンインの程嬰は赤ちゃんを薬箱に隠して、趙盾の友人である公孫のところへ逃れました。

屠岸賈は趙家の根を徹底的に絶とうと、国中の一歳以下の赤ちゃんを全部殺すことを命じ、途方に暮れた程嬰は公孫と策を考え、自分の妻が生んでから間もない赤ちゃんを公孫の家に託し、程嬰は公孫が趙盾の赤ちゃんを隠していると屠岸賈に告発する事にしました。結果は程嬰の赤ちゃんも、公孫も殺されました。程嬰の赤ちゃんは趙盾の赤ちゃんの身代りになったのです。その後、程嬰は趙盾の遺児を連れて山へ隠棲し、大切に育てました。

山の奥で十五年の歳月を経、孤児は堂々たる趙武ウと言う青年になり、忠臣たちの助けによって、国へ帰り、屠岸賈を討ち、一族の仇を払い、趙氏一族の復興を果たしたということです。

実は、「趙氏孤児」の演目は、元の時代の雑劇で演じられていましたが、その後、京劇だけではなく、中国の殆どの芝居で演じられるようになりました。「趙氏孤児」の物語が、古くから広く知られて来た所以ゆえんです。

山西省太原市の北へ120キロ離れたところに、孟県イと言う県があり、孟県には「蔵山」と言う有名な山があります。2000年前に程嬰が趙氏孤児を隠した山だと遠い昔から伝えられて来ました。

「蔵山」には、趙氏孤児を隠したと言われる「蔵孤洞」、趙氏孤児を救う忠臣を賛美する古い石碑、程嬰、公孫を祭る廟、趙氏孤児である趙武を祭る「文子祠」など三十箇所の見所があり、千年にわたってお参りする人々が焚



く線香の火が未だ絶えません。

この「蔵山」が本当に孤児を隠した山かどうかについては、歴史家達が是か非かの論争を繰り広げて来ました。

しかし、孟県と言うところは、その昔、趙国が治めた地域の中心地であることは疑う余地のない事実です。

春秋戦国時代(B.C.770年～B.C.221年)は、周代(B.C.11世紀～B.C.256年)の礼儀制度を引き継ぎ、祖先を祭る事を何よりも大事なことしました。今、孟県には、趙氏孤児の趙武を祭る廟が九つもあり、この地の人々は、ずっと昔から趙武を大王、「趙武廟」を「大王廟」と呼んでいます。趙国の子孫は、2000年も前からこの山で国の祖先たちを祭り始めたと言っても過言ではないと思います。

2000年前に、忠臣たちが罪を冒して趙氏孤児を育てたため、趙の一族の血筋は保たれ、趙国の英雄といわれる、趙簡子ジャンズ、趙襄子ジャンズ、趙武靈王などが輩出しました。

その後、韓、趙、魏の三家が晋国を分割するという歴史的な事件が発生、戦国の七雄の一つとなる趙国が建国し、200年あまりも続く戦国時代の紛争の幕が開けられました。

歴史の流れは、このように偶然によるものと必然的なものが絡み合っ織りなされてゆくのだと思います。

【10月号の訂正】

10月号の「壺口瀑布」、左段写真そばに「間もなくまた太行山脈に阻まれ」と書きましたが、正しいのは「呂梁山に阻まれ」です。不注意をお詫びします。(何媛媛)



たまたま路上で出会い、私はこの赤い服を着た彩虹という女の子と知り合いました。2001年8月、私は安塞の裏谷を通して、何ヶ月か前に写真撮った女の子を訪ねて竜泉寺村へ行こうと歩いていました。杜村を過ぎたところで、二人の女の子が喋ったり笑ったりしながらのんびり歩いているのを見かけました。

その一人が赤い服を着て、髪の髷(まげ)を毛糸の紐で結んで長く垂らしており、その紐は頭を振るたびに跳ね上がってとても可愛いらしいのです。その子が彩虹です。私は思わずカメラを構え彼女に焦点を合わせて何枚かの写真を撮りました。いい具合に雨が上がったところで空が晴れ、青い空にうろこ雲が浮かんでいます。黄土に立つ赤い衣装の女の子の姿は絵のようです。詩情溢れる時の中にいるようで、体中の疲れが瞬時に癒されました。

午後、竜泉村から戻るとき、又彩虹に会えればいいと思って大急ぎで取って返しました。喜ばしいことに、杜村に戻ってみると再び道端でこの子に会えました。私はすぐにこの



子にアンケート用紙を渡して書いてもらい、又何枚か写真を撮りました。昼前に会っているので午後はとても打ち解けた感じでした。私は別れるときにも又この子と、この子と一緒にいた女の子をいっしょに写真を撮りました。

翌年1月2日、私は彩虹の取材を目的に又裏谷に行きました。農閑期だったこともあって、家には大勢の近隣の

人が集まり、私が写した彩虹の写真を手に口々に褒めそやしました。私は勢いで又彼女とお母さんとお姉さんをいっしょに写しました。この写真を見ると、母子三人はまるで瓜二つです。

ある日、仏教を研究している友達が訪ねて来て、彩虹の写真を見るとビックリしたように言いました。「この

子は、漢代に作られた仏像の中の観音菩薩によく似ているな。」彼に言われてよくよく見ますと、本当に目鼻立ちが塩梅よく配置され、眉の辺りが伸びやかで、ふっくらとした顔つきに慈愛を感じます。北魏時代の観世音菩薩はみんなこんな風です。

彩虹が理想として選んだのは、教師、科学者、医者、警官で、これらの職業はどれも人々に幸福と神の加護をもたらすもので、私は心の中で彼女がこれらの職業を選ぶのには内的に何か関わるものがあるのではないかと思うのです。



1999年の正月に私は友達と一緒に劉家山村に行きました。ここは風景写真を撮すにはとてもいいところです。黄河が流れを変え、峡谷や溪流、廃屋となった石造りの窑洞、満面に人生の皺を刻んだ老人……気持ちの向くまま

ひと通り写真を撮って、私達は村を離れました。が、村はずれの崩れた洞の前で、ある情景が私を惹き付けました。10歳ほどの女の子がまだ歩かない男の子を抱いて石臼に寄りかかっていた。真っ赤なほっぺにはにかんだ表情で、その大変そうな姿が私の心を急に重くしました。私は彼女に焦点を合わせてシャッターを押し、先に進みました。しかし、この女の子の姿がいつまでも私の心を捉えて離しません。この後、劉家山村で何人かの女の子たちを撮影しましたが、この女子(こ)を見ませんでした。

2001年8月、私はこの子を探し出す目的で、又、劉家山村にやって来ました。写真を見せると、村の子供たちがすぐ教えてくれ、苗苗というこの女子(こ)の家を見つけ出すことが出来ました。薄暗い窑洞の中に入り、しばらく眸をこらしてやっと3人の子供たちがオンドルの上に横になっているのが分かりました。子供たちは見知らぬ人が入ってきたので、不思議そうな表情で身体を寄せ合いました。この窑洞はとても粗末なもので、壁には何もなく、多くの窑洞の家のように新聞紙を貼り付けたりせず黄土がむき出しになっています。オンドルの上の掛け布団も敷布団も壁の色とあまり変わりません。いったいこの家の大人たちはどういう風に過ごしているのでしょうか？

私が2年前に写した写真を苗苗に渡すと、多分生まれて初めて自分の姿を写した写真を見たのでしょうか、やっと笑顔がこぼれました。苗苗の乱れた髪の毛の下の双眸には、実際の年齢とは不相応な、老成し、物憂そうな感じが浮かんでいます。アンケートの書き込みを頼むと、しばらく躊躇(ためら)ってから、すらすらと書き始めました。彼女の文字はとてもきちんとしています。アンケートの最後の一項目“大きくなったら何をしたいと思うか”を書き込むときは長い間考え込んでいました。アンケートを書いたことのある周りの子どもたちが、“先生になる”、“技師になる”など度々ヒントを出しましたが、結局、彼女が書いたのは“大きくなったら仕事をする”という(彼女の)辛い心の内を語るものでした。

そうです、2年生も終わらないうちに学校を止め、家で弟や妹の面倒を見、家事をしています。ひたすら自分が早く大人になって、家の助けが出来るようになりたいと思うしかないのです。‘老四’と呼ばれている30何歳かの彼女の父親は忸怩(じくじ)たる表情で“どうしようもない。母親は病気(噂では精神病とのこと)だし、あの子は一番大きいらだから家の面倒を見なきゃ。”と言います。私はオンドルの上の子どもたちを見ながら黙るしかありません。帰りしな‘老四’に伝えました。“学校が間もなく始まるから、学校に行かせてください。今、遅れてしまうとこの子は一生遅れてしまいますよ。”父親はその通りだと頷きました。

私は苗苗のために何枚か写真を撮り、また弟や妹達も一緒に撮り、家族全員の写真も撮りました。けれども母親の姿はありませんでした。私は彼女も出てきて一緒に写そうと父親に言いましたが、‘老四’は断固として反対するので諦めざるを得ませんでした。私は、苗苗が相変わらず一番小さい弟の傍を少しの間も離れないのに気が付きました。彼はもう思うまま走り回れるようになったにも拘らずです。

苗苗の家の貧しさは言うまでもなく、母親は病気で、子どもたちはまともな衣服は一枚もありませんし、‘老四’は真面目に農作業をしていません。しかし、黄土のこの土地で6人分の口を養い、加えて4人の子どもたちの学費を捻出していくことは本当に容易なことではありません。‘老四’の生活はとても厳しいのです。何年か前に5番目の子どもである男の子が生まれましたが、養育できないと人を介して河北省の知り合いに貰ってもらいました。恐らく子どもを貰い受けた人は幾ばくかのお金を渡したことでしょう。それで‘老四’は悟るものがありました。

この何年間か、彼の連れ合いは殆ど毎年のように子どもを生み、死んで生まれなければすぐに人に手渡しているとのこと。二嫂と呼ばれる女の子はお母さんが2人の女の子と1人の男の子を産んだのを見たといっています。可哀相な母親は、お産婆さんの手も借りず、自分の家のオンドルの上で生んだのです。ある時、‘老四’が外出している時に産気づき、子供たちを吃驚(びっくり)させました。血と肉の塊のような嬰兒(あかんぼう)はオンドルの上に放って置かれたままで、‘老四’が家に戻ってきた時は嬰



▼〈苗苗〉続き

児(あかんぼう)はもう死んでいました。

‘老四’とお母さんは2人とも顔立ちが良いので、子供たちは皆とても健康で可愛らしいです。特に、チビの二嬢は顔だちが益々はっきりとして来て、笑えば愛さずにはいられません。それに比べると、苗苗は大人びて少々年齢に相応しくなく、カメラを向けて笑うように呼びかけてもどこか無理があります。仕方がないことです。

ある日、私の学生から電話があり、大学を間もなく卒業するので、衣服を少々処分したいと言ってきました。私は黄河河畔の人たちの生活は厳しいのでそれらの衣服を或る貧しい家に送って欲しいと伝えました。私が‘老四’に‘どうですか?’と訊ねると、‘老四’は当然ながら是非にとのこと。しかし荷物を送るには姓名を書かなければなりません。私が彼に本名はなんというのか訊ねますと、出まかせのように‘老四’だよ。劉家村の‘老四’といえばこの人はみな知っている」と言います。私が真顔で、‘姓名

は書かなきゃ」と言うとやっと劉世亮だと答えました。

‘老四’は生活について全くとっていいほど気にかけないのですが、苗苗の方は一生懸命です。ある時、彼女は隣のオバサンに言ったそうです。「お父さんは私が大きくなったので勉強する必要はない、家のことをしなさいと言ってるの。」しかし、苗苗は学校で自分に権利があることを知ったのです。「でも、法律があるから私を学校に行かせなければ、お父さんを訴える。」苗苗は真顔だったそうです。

14歳の少女はやっと小学校4年生として勉強しています。町の同年齢の子供たちは恐らく中学生になったでしょう。貧困が苗苗の前途を山のように立ちふさいでも、賢い苗苗が自分の努力で切り抜け、きっと明るい未来を創り上げ、自分の居場所を見つけることが出来るようにと私は心底から祈っています。

(田井訳)

中国を読む⑳

『至福のとき—莫言 中短編集—』

吉田富夫訳、平凡社

9月に第17回福岡アジア文化賞大賞を受賞した莫言氏。日本では張芸謀氏の映画「紅いコーリャン」「至福のとき」の原作者として有名。莫言というペンネームのココロは「言う莫れ」。「本当のことを言い過ぎる」という母親の心配が由来だとか。文化大革命の「洗礼」を受けてもなお「本当のことを言い過ぎる」彼の小説は深すぎて、本物の絶望を知らない私には理解できない部分も多い。

「至福のとき」には表題を含めた中短編5編が収められている。出てくるのはチョイ駄目男たちで、熱っぽく埃っぽい街や村で彼らはメゲながらも駄目なりに生きている。

収められている作品のなかで、私は「至福のなか」が一番好きだ。リストラされた駄目男が始めた男女の休憩所。意外に儲かってノリノリだったところに、起きた事件の行く末は…。

山東省の農家で育った著者の原風景が生かされている「飛蝗」。村で突然発生するイナゴやバッタの大群を象徴的に描き、濃厚な人間関係の歪みが語られる。「宝の地図」は、久しぶりに会った同級生と餃子

屋で繰り広げる法螺話。お酒が好きな人なら、飲みの席で下らない話で盛り上がった経験をお持ちだと思うが、餃子屋の酔っ払いの話はスケールが大きい。人間が動物に見える幻の虎の髭、孔子の末裔が袁世凱にかけた魔術…実は餃子屋の老夫婦が西太后に仕えた貴人たちで、秘伝のレシピまで風呂敷は広がっていく。

「長安街のロバに乗った美女」は、著者が長安街を車で通ったとき「厳粛なこの大通りに、ロバに乗った美女と古代の甲冑に身を固めた騎士が突然現れたら、どういうことになるだろう」と思いついた妄想がきっかけになった小説。さっと夢が消えるラストは狐につままれた読後感。「沈園」でも、一瞬の夢のうち、すぐに現実に戻されてしまう男女のことがニヒルに描かれている。

「文化大革命」という国を揚げての大きな夢が破れた—その「洗礼」を受けた著者は理想や夢に対して徹底的に懐疑的なのかもしれない。甘さを見せない彼の小説は、張芸謀氏の映画とは違う世界を見せてくれる。

(真中智子)



今回は「朝三暮四」(ちょうさんぼし)です。ちょっと「朝令暮改」と似た語感ですが別の熟語です。早速、辞書で調べてみますと、それぞれ次のような意味が載っていました。

現代国語辞典(三省堂)では、「▶見かけの違いにごまかされ、結果は同じであることに気づかないこと。▶口先だけで、人をごまかす(だます)こと。」

大辞林(三省堂)では、「▶表面的な相違や利害にとらわれて結果が同じになることに気づかぬこと。▶うまい言葉で人をだますこと。▶命をつなぐがけの生活、生計。」

中日辞典(小学館)では、「朝三暮四 ▶ 移り気であることのとえ、また、考えや方針が定まらず、当てにならないこと。」

これを見ますと中日辞典の内容は他の辞典の内容とは、意味合いが異なっていることが分かります。これは出典に対する日本と中国との解釈の違いなのでしょう。そして日本の中でも複数の意味に用いられていることがわかります。

出典は中国の「莊子-内篇▶齊物論」「列子-黃帝」などの故事です。

宋の国の狙公(そこう: 猿まわし)は、猿が好きでたくさんの猿を飼っていました。狙公は猿の気持ちを理解できたので、猿も狙公の話すことが分かっていました。狙公は自分の家族の食べる物を倏約してまで、猿の欲しがるものは何でも与えて

いましたが、かわいがりすぎるあまりに財産を使い果たして、とうとう貧乏になってしまいました。そこで仕方なく猿の食事量を減らすことにしました。ただ、猿たちに嫌われてなつかなくなってしまうのが心配だったので猿たちをちょっとだますことにしました。

ある朝、お腹がすいている猿の前で、狙公が「おまえたちの食事のことだが、これからは朝食は木の実を3つに減らそうと思う。そして、夜は4つにしよう。それで足りるかな?」と言いました。それを聞いた猿たちは、「なぜこんなにお腹が減っているのに3つなんだ!」と、立ち上がって怒り出しました。

それを見て狙公はすぐに、「わかった、わかった! 私が悪かった。じゃあ、お腹がすいているおまえたちのために、やっぱり木の実は4つに増やすことにするよ。そのかわり、夜は3つになってしまうが、それでいいかな?」と言いました。

今のことしか考えられない猿たちは、自分たちの気持ちを理解して朝食を増やしてくれた狙公にひれ伏して感謝した、ということです。

このことから「朝三暮四」とは、実質的には同じなのに、目先の利益にとらわれて全体を見誤ること、または小手先でごまかす、うまくまるめこむことを意味するようになりました。

* 宋(そう): 中国の春秋時代(BC770 ~ BC403)の国の名

松本杏花さんの俳句 niān huā wēixiào 《拈花微笑》より

湖静か月の出を待つ煙水亭

húshuǐ píng rújìng
湖水平如鏡

zhī dài míngyuè kuài shēngkōng
只待明月快升空

yōuyōu yān shuǐ tíng
幽幽烟水亭

季語：月，秋。

此句宛如一幅暮色苍茫的水墨画，恬淡静谧。用烟水亭等待月亮升空这一拟人化的描写，又将这沉静的景物激活了，令我们仿佛能马上观赏到空中的明月和水中的倒影。

曲屋の屋根に群がるる赤まんま

línjiē yī dāngpù
临街一当铺

jiǎ cháng wěi liǎo wū jǐ cù
假长尾蓼屋脊簇

yǎnrú chì fàn hū
俨如赤饭乎

季語：假长尾蓼，秋。

此种为一年生草本植物，高20至30厘米，6月至10月至顶端花穗上开红花。粒状红花形似赤豆米，故亦有“红小豆”之称。当铺屋脊上的野花都是“红小豆”，真是生意兴隆，财源茂盛啊！

9月の初め、山小屋泊まりの一泊二日の日程で、韓国の智異山国立公園にある天王峰に登ってきました。

智異山国立公園は、およそ南北が20km、東西が60km、総面積が439平方キロメートルで、公園内には最高峰の天王峰(1915m、韓国本土の最高峰、韓国の最高峰は済州島のハルラ山)を始めとする、高さ1800m級の数十の峰々が連なり、その渓谷美と裾野に点在する古寺名刹でも広く知られ、春から秋にはたくさんの登山客や観光客で賑わうそうです。

ハングルも満足に読めない私と夫の二人、初めての韓国での登山は細かい情報が得られない危なっかしい登山行でしたが、現地の人たちに助けられてなんとか楽しい思い出を得ることができました。行ってみれば何とかなると気をよくし、また次の山を探しているところ。いくらかでも山に関心をお持ちの方々のお役に立てればと、山にたどり着くまでのいきさつと山行記録を書こうと思います。

🌲情報を集める：智異山に登ってみようと思いついて日本で手に入る資料を探しました。残念ながら日本語のガイドブックなどは見つからず、インターネットで探すことにしました。しかし、「知異山」で検索しても観光案内や名物の山菜料理の話題などで肝心の情報は得られませんでした。(現在は9月26日に登山をした運動具店の人の体験記が見られます。)そこで「韓国登山」で検索をしたところ2人の人の登山記録が載っていました。早速メールでコンタクトをとり、情報を集め、地図を見ながらコースを検討した結果、北側から登るのが最短距離で、しかも比較的楽なコースのようなので、そのコースをたどることにしました。

🌲山小屋の予約に苦勞：山小屋に泊まるには宿泊予定の2週間前から2日前までに国立公園管理事務所に予約をしなければいけません。韓国観光公社のホームページから智異山国立公園案内にたどり着こうと試みましたが、どういうわけか日本語ではたどり着けず、英語版を見

ることになりました。そこには山小屋の予約先とメールかファックスでの予約が必要と書いてありました。まず英語で予約のリクエストをメールで送りました。しかし、一週間たってもなんの連絡もありません。さらにファックスでも予約をいれましたがこれもまた返事がありませんでした。

多少不安になってきましたが、予定日が平日であるし、登山シーズンからは外れているし、収容人数が150人なので、万一予約ができていなくても泊まれるだろうと楽

観的に考えて韓国へ出発しました。

ソウルに到着した翌日、韓国観光公社の観光案内所へ行き予約の返事が来ないことを話すと確認の電話を入れてくれました。そこで判ったことは、公園管理事務所では日本語も英語も判る人がいないので予約は韓国語以外は受け付けていないということでした。おま

けに予定していた日はすでに満員で泊まれないこと、明後日(日曜日の夜)ならばあと3名受け付けるということでした。まったく危ういところでした。

実際、山小屋にたどり着いてみると予約をしていない登山者が受付で断られており、途方にくれている登山者が3人程いました。そのうち一人は女性でしたが、すべての予約客が指定された場所に寝床を確保してから、し





ばらくしてやっと許可が下りたようで、ホッとした様子で女性用の部屋に入ってきました。部屋は決して満杯ではなく、どう見積もっても収容人数の150人の半分ぐらいでしたのでこの厳しさには少々驚きました。

私たちは観光公社のサービスに大いに助けてもらって早速予定を変更し、明後日の宿泊の予約をしてもらい、さらに登山口付近の民宿を紹介してもらい、明日中に登山口ちかくまでたどり着くことにしました。

交通機関：ソウルから鉄道で途中乗り換えの時間も含めて約4時間、全羅北道の南原に到着、そこからバスで一時間、登山口の白武洞(ペクムドン)に着きました。バスを降りてみるとなんとバスロータリーにはソウルからの直行の高速バスが止まっていた。

ソウルから4時間で到着。バスのほうが便利で速いようです。ただし事前の電話予約が必要で、韓国語が出来ない、海外の人間には難しそうです。

山小屋の利用：山小屋は寝具持ち込みと自炊が原則です。1人1泊が7000ウォン(およそ900円)です。小屋は大きく、板張りの清潔なしっかりとした作りです。

水場は50mほど下った南斜面にあり、トイレは男女別で大きく、外に作られていました。自炊のために日本からブタンバーナーを持って来ましたが、ガスカートリッジはソウルの登山用具店で買いました(一本1500ウォン)。食料も2日間・5食分を用意しなければなりません。日本から持っていった物の他にはソウルのコンビニでカップラーメンを買い、すこしかさ張る荷物になりました。しかし、山小屋に到着してみればガスカートリッジやカップラーメン、缶ジュース、ペットボトル入りの飲料水、ビスケット、チョコレート、缶詰ハムなどが受付で売られていました。

もちろん平地よりは高い値段ですが、非常食の用意だ

けで後は身軽に登ることが出来そうです。ビールなどのアルコール飲料はありませんでした。小屋のチェックインは6時からでそれ以前は入室は出来ません。入り口付近のホールだけは疲れて休みたい人たちのために開放されていました。

日本では安全のために早朝出発をして早くに山小屋にたどり着くことが常識となっていますが、韓国では事情がちがうようです。夕方ちかくなってから続々と登山者が到着をし、さらには小屋を素通りして先へ進む人たちも少なからずいました。

小屋の中では飲食は禁じられていますので、外に作られている炊事小屋でラーメンを作り、

そそくさと食べ、後は寝るのを待つだけとなりました。私たちは寝具を持って行きませんでした、毛布は一枚1000ウォン(およそ120円)で借りられますので、予約のときに一人2枚ずつを頼みました。板敷きの寝床に一枚を敷き、一枚を掛けて寝ましたが、疲れもあってぐっすり寝ることが出来ました。

出発前の資料集めや小屋の予約に悪戦苦闘させられ、ソウルについての急な予定変更にあたふたし、ようやく山に登り、小屋に横たわることが出来たとき、本当に安堵感を味わうことができました。

♪ 中国人歌手・趙鳳英さんと一緒に歌おう! ♪

「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中!
会場:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分 町田東急裏109ファッションビル7F

会費:1,500円(一回ごと)

【11月の練習日】

11月17日(金) 19:00~20:30

練習曲:「雨夜花」(南国の花)

作詞:周添旺 作曲:鄧雨賢

すでに台湾の民謡になってしまっている、懐メロ的な古い歌で、これまでにいろいろな歌手に歌われています。テレサテンも歌い彼女のヒット曲にもなった中国的な美しいメロディの歌です。

指導:趙鳳英(元中国重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

- *体験参加が無料になりました!
- *皆様のご参加を歓迎します。
- *録音機をお持ち下さい。

この旅で二度目になる庚定に向うバスに揺られながら、私の心はわき上がる嬉しさで踊っていた。これから旅の第二部が始まるうとしているところだった……。

きっかけは登山だった。

今年の7月、山と自然と高山植物が好きな有志十数名で、中国四川省の名峰四姑娘山麓をめぐる旅に、ギリギリになってから飛びこみ参加するのを決めたのだ。

春の終わり頃、母から中国に行くという話を聞いた時には、自分がその旅に同行するとはまったく思っていなかった。ところが後になってから今回の旅で、四姑娘山の末娘『大姑娘山』に登ると聞いてから私の心は大きく揺れ始めてしまった。

四姑娘(スークーニャン)山はその名の通り、四姑娘、三姑娘、二姑娘、大姑娘と四つの山が高度の高い順に姉妹の様に並んでそびえている美しい山で、大姑娘は一番低いといっても5000メートルを超える高山だ。登山の楽しさに目覚めたばかりの私は、とにかく高い山に登ったという事が自慢の種になるような気がして、旅の日程表にも口々に目を通さずに参加を決めてしまった。

そこがどんな場所かも知らずに、皆に着いて行った四姑娘山麓は美しい土地だった。雪を頂いて輝く四姑娘山が眼前にそびえ、色とりどりの高山植物がまるで絨毯のように野を埋め尽くしていた。そして、自然の美しさもさることながら、この土地の人は誰もが優しい。旅の随所で出会った微笑みを絶やさない暖かい人たちと、車窓から垣間見られる彼らの穏やかな生活風景に、私はぐんぐん引き付けられていった。

旅の目的であった筈の大姑娘登山を果たし麓の村に戻ってきた時には、私の心を最も捉えていたのは、登頂の喜びよりもキャンプ生活を影で支えポーターとして私たちの登山に付き添ってくれていた、チベット族の少女の笑顔と優しさだったように思う。ほとんど会話らしい言葉も交わす事はなかったが、彼女の心配りには「仕事だから」という以上の暖かさが感じられた。

旅の日程も折り返し地点を過ぎ、この旅も一段落とあったある日、移動の車は美しい景色の流れる道をゆるやかに走っていた。

やや埃っぽい村の風景が、傾きかけた日差しを浴び

て暖かい色に光っていた。石と泥でつくられた小さいお城のような可愛い家が、ぼつぼつと立ち並ぶチベット族の村はまるで童話の挿絵の様に美しい。

ガードレールも無い道路を、泥んこで駆け回る子供達。顔も服も真っ黒に汚れているが、彼らの表情は弾ける様に明るい。それを日向ぼっこしながら見守る老人。通り過ぎる旅人にもおだやかな笑顔を向けてくる村人達。家畜が柵に囲われる事も無くのんびりと道路を歩いていた。なんだか人も動物も自然の中にとけ込んでいて、その境目というのがあまり明確ではないような、自然と一体になっている生活とでもいえばよいのか、そんな印象を受け、見ているだけで胸の中が暖まってくるような気持ちになった。

時おり道路をふさいで座り込んでいる牛もいるが、この土地の運転手は笑いながらスピードを落してクラクションを鳴らす。「危ないからちゃんと繋いでもらわないと困るじゃないか！」ここではそんな事を言う人もいないのだろう。

それは必ずしも良い面ばかりではないだろうが、何かと目くじらを立て規則に縛られてギスギスした人間関係に陥りがちな現代の日本が、物質的な豊かさと引き換えに失ってしまったもの……かつての日本も持っていたに違いない穏やかさというようなものが、彼らの生活の中にはいっぱい満ちているように思われた。

幸せって何なんだろう……使い古された様な言葉が心の中に浮かんでくる。

もっとゆっくり彼らと交わってみたい、バスの窓から見下ろすのではなく同じ目線で村の生活に触れてみたい。そんな気持ちが日増しに募ってくるが、スケジュールに合わせて日程をこなしていかなければならない団体旅行では、どうしても時間や行動範囲に制約が出てしまう。旅の後半に入ってから、私の心の中ではある気持ちが固まりつつあった。……まだ帰りたくない。

幸いと言うべきか、情けないと言うべきか、勤めていた仕事を辞めて今回の旅に参加していた私には、別に急いで帰国しなければならない理由は無いのだった。『帰りの航空券をもう一度買えば良いだけの事じゃん...!』

中国に関しては、今回を含め、二度ほど他人にプラ

ソニングしてもらった旅に参加し、皆についていただけなので何の知識もなかったが、海外を一人旅した経験は数度ある。一人で行動できる自信はあった。

新宿、大久保という外国人の吹き溜まりのような街で、数年間飲食業を生業としてきた経験により、中国語も日常会話初級程度なら何とかいける。それに加えて、中国の四川省には私が心の隅でひそかに温め続けていた、どうしてももう一度行きたい思い出の場所があるのだった。

三年前の夏、わりいでもおなじみの鳥里鳥沙氏のプランニングにより、半月程の日程で四川省の東チベット地方をめぐり「最後のシャングリラ」とも呼ばれる亜丁自然保護区を訪れる旅に参加した。

『チベットに行くんだよ』という母の言葉に、即座に『ラサ』という地名を思い浮かべ、『私も行く!』と叫んで参加を決めたのだったが、何事につけても大雑把な私は、旅行について深く尋ねる事もせず、いわれるままに旅費を振り込み、後になってから簡単な旅程表を母に手渡されて初めて、目的地がチベット自治区のラサではなく中国四川省である事を知った。

その時の気分はハッキリ行って『騙された〜!』と言うものだった。大久保という街で、比較的ガラのよろしくない中国人に囲まれた生活環境にいた私にとって、中国のイメージはあまり良いものではなかったのだ。しかし、実際に行ってみた四川省山岳地帯の世界は、私が思っていた中国とは人も文化もまったく違っていた。

中国の中にこんな世界があったなんて……!それは全く目からウロコが落ちる思いで、騙された、騙されたとブツブツつぶやいては『自分で行きたいと言ったんでしょ!』と母に怒鳴られていた私は、そんな事はアツという間に忘れ、旅の途中からはすっかり夢中になってしまった。

そして訪れた最終目的地である「最後のシャングリラ」亜丁自然保護区。ほんの二日間滞在しただけのその場所が、その後ずっと忘れられない場所として私の心の中に深く潜んでいた。

思えば、その旅の帰り道も今回と同じ事を考えていたのだ。旅の日程は終わりに近づいていた。四川省チベット圏の玄関口といわれる康定の街を出れば、後は成都に向かい日本に帰るだけというバスの中で、私は切なかった。

道路工事の影響か、押している日程を取り戻すため

だったのか、夜を徹して成都に向かうというバスの出発は黄昏時で、道は渋滞していたためゆっくり康定の街と別れを惜しむ事ができた。バスの窓からこの街で生活している人々の日常の風景が見えた。道端で中国将棋に興じるもの、リヤカーで炭を運んでいるもの、街角の食堂から立ち上る湯気、崩れそうなビルの雑貨屋。私は今すぐバスを飛び降りて自分もその風景の一部になりたかった。

いつかきっと一人でここに帰ってきたい…もっと自由に気に入った場所に滞在し、好きなように街や村を歩き回りたい…そんな気持ちをかみしめながら、バスの車窓を流れていく康定の街をぼんやりと見つめ、センチメンタルな気持ちに浸っていたことを思い出す。

そして今回、突然その希望をかなえるチャンスがめぐってきたのだ。突然といっても、心のどこかで薄々そうなる事を、自分に期待していた私は、抜かりなく貴重品を入れた胴巻きの中にクレジットカードを忍ばせていた。これでとりあえず、帰りの航空券を買うためのお金の心配はいらない。航空券代はちょっと痛い出費だが、それ以上にこのチャンスを逃したくなかった。

そんな私の気持ちを後押しするように突然フラッと現れたのは、私を四川省の世界へといざなった仕掛け人、鳥里鳥沙氏だった。今回も皆で旅の最後を過ごした康定の街を出て、成都に向かうバスに今まさに乗り込もうとしたその時にである。

考えてみれば彼は康定出身の人なので、そこに居てもそれほど不思議は無かったのだが、今回の旅には過去に鳥里氏と中国を旅したことのあるメンバーが何人も混じっていて、思わぬところで知人に出会い皆ビックリしていた。

私は思わず鳥里氏に駆け寄り、「一人で亜丁まで行きたいんだけど、大丈夫かな?」と尋ねると、「何かあったら電話して良いよ」と自分の名刺に携帯電話の番号を走り書きして渡してくれた。

旅の一行は成都に戻り、私は一緒に参加していた母に居残りの決意を告げた。私の性格を熟知している母は、最初のうちこそ難色を示したものの、言ってもムダだと思ったのか『まあ、気をつけて行っていらっしゃい』と言うと使い残りの中国元を渡してくれた。

【続く】

ケニアでは、日本がどこにあるのかわからない人はたくさんいても、「Toyota」や「Nissan」が日本車であることを知らない人はほとんどいないのではないかと思います。くらい日本車熱は高い。日本の車イコール性能がいい、エンジンがいい、長く乗れるということで日本車人気は高いのです。

ケニアでの一般の人々の移動手段は、バス、乗り合いバスやタクシーであり、毎日の通勤や帰省する足として毎日ケニア中を隈なく走っている。バスは、「KBS」（ケニアバスサービス）といって主にナイロビなどの都市部で市民の通勤や通学の足として比較的短距離を格安で運行している。

私は数回乗ってみたことがあるが、朝夕のラッシュの込み具合は、日本の通勤電車に引けを取らないくらい込みようである。バスと言っても、バスの停留所が在るわけではなく出発地点から終着地点の間にあるメジャーな場所（病院、市場、役所などのランドマークがあるところ、人がたくさん住んでいる所）を中心に停まるという具合なので初心者には非常に分かりにくい。一応一時間に何本というダイヤはあるが、基本的には人が一杯になったら出発というのが多い。

そして人でぎゅうぎゅうになって出発するが、暫くすると切符を切る車掌さんが回ってくる。自分の手さえ動かすのがやつのスペースの中を押し合ってやって来るのである。運賃は、どんな乗り物よりも安く設定されており、例えば私がたまに乗っていたウエストランドという場所からナイロビ中心にあるバスステーションまでは、日本円にして20円くらいである。乗車時間は渋滞していることが多いこともあり20分くらいである。乗り合いバスは、60円くらい、タクシーで100円くらいであったらだろうか。

自分のポケットからお金を出すのも一苦勞であるが、盗難にあう確率も非常に高いのが難点である。ポケットに入れた携帯電話、お金など自分も知らないうちになくなっているのだ。ポケットや鞆の一部が刃物で切り取られていたりもする。だから乗客は、お金は靴の中や帽子の中に入れてたり、服の一部を折り曲げて入っていたりして自己防衛を上手に図っている。



私も最初の頃は、携帯電話、パスポート、お金、財布いろいろ盗難にあったが、その度にいろんな人から学び、帰国する頃には何も盗まれなくなった。ケニアでは盗難にあっても、誰も同情しない。まず最初に聞かれるのが「なんでそんな無防備にしていたの?」という批判だ。「そんなんじゃ、仕方ないよ」と言われる。

そんな混んでいるバス車内であるから、車掌さんがすべてのお客から公平に運賃を集めるのも困難である。運賃を集めに来る前に駅が来て降りていく人もいりし、誰が払って誰がまだなのか分からなくなることもあるし、「もう払ったよ」と言ってしまうことも可能だ。

そして払い終わると紙の切符がもらえるが、それをもたらう頃にはほとんど降りる直前だったように思う。盗難も多いが、親切にされることも多い。まず子供を連れていると、あちこちからこちらへと席へ誘導してくれる手が伸びてくる。乗り降りも必ず誰かが運転手に待つように叫んでくれるし、荷物も子供も代わりに降ろしてくれる。なのでお母さんで子供を何人も連れていても、心配なく移動することが出来る。お年よりも、子供もみんな心配なく移動できる。こんなラッシュアワーの満員のバスなのに、である。

大型ケニアバスよりももっと人々が利用するのが、「マタツ」と呼ばれている小型の乗り合いバスである。別名「ニッサン」とも呼ばれ、日産のキャラバンのことである。また同じ形のトヨタの「ハイエース」もよく

走っているが、これも名前は「ニッサン」と呼ばれている。また車業界の人達は「シャーク」と名づけ、鯨のように道路をすいすい走っていくイメージからくと説明する。以前は、このマタツもバスと同じように乗れるだけ乗客を乗せていたが、新政府になり立ち乗りは禁止され、定員は14名までと定められている。

マタツは、それはもうケニア全土に網の目の様に路線が張り巡らされていて、どこでもいけるようになっている。マタツには、「sacco(サコ)」という協同組合があり、停留所の場所、運賃、路線数等管理されており、すべてのマタツ所有者はそこに登録し、登録料を払って運営しているのである。

マタツは朝夕は毎分ごとに何台も同じ路線を走っており、バスのように何時間も待ち時間が発生することもなく、きちんと座席があり、快適であるが、スピードが速すぎるのが恐ろしいところである。私はナイロビ市内までマタツで通勤していたが、40km以上離れた町であるのに、渋滞がなければ30分くらいで着いてしまうのである。スピードは時速100kmは超えていたように思う。

ドライバーと言えば、陽気にアフリカの音楽をかけ、歌いつつ運転しているのである。運転はみんなF1ドライバー並みに上手であるが、死亡事故のニュースもよく聞く。

マタツの車内には、「マカンガ」と呼ばれる運賃を集める人が乗っている。順番に一人ずつ集めていくので、バスと違い払い忘れがない。バスよりは割高ではあるが、2時間乗っていても500円くらいのものなので私には割安感があるが、ケニアの普通の人々はクリスマスに田舎に帰るために旅費を少しずつ貯めている。またお葬式や結婚式、旅行などの時は、運転手つきで一日チャーターすることも出来る。私も、引越しや友達が大勢来た時等よく利用した。一日2000円くらいだったように思う。

車内の楽しみは、ラジオから流れてくる音楽とおしゃべりであった。一日のほんの少しの時間を知らない人とおしゃべりの中で、私は本当にいろんなことを教えてもらった。日本に来たことがあり日本語が完璧に出来る人もいたし、有名ミュージシャンも普通に乗っていてみんなとおしゃべりしているし、出会いの場でもあった。

特に、ナイロビの市内から田舎に向かうマタツは、乗客が同郷のなじみの顔であることも多く遠足の様な感じでとても楽しい雰囲気であった。また出発を待つ

ていると「この手紙を誰々に渡して置いて下さい」と窓越しに頼まれることもある。

ケニアには52民族いるが同じ行き先には同じ民族の乗客であることも多いので、綺麗な衣装のマサイ族しか乗っていなかったマタツに乗り合わせると、洋服を着てきた自分が妙に浮いていたようなこともあった。みんな私を見て、「ソバ！ (=こんにちは)」と笑ってくれていた。

中古の日本車は、ケニアのいたるところで元気に活躍している。ただどんなに古い車でいいのかということではなくて、7年未満と法律で定められている。日本では流行を過ぎ人気のなくなった車でも、少々痛んだ車でも、あちらでは人々の重要な足として、きちんとメンテナンスされて現役を続けている。

遠くアフリカのケニアでは、新車や中古車の日本車が活躍する日本車天国なのである。

‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会として、日本に外国の方が増え始めた1992年に活動が始まりました。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わんりい’HPをご覧ください。

‘わんりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わんりい’の全ての活動に参加できます。

問合せ：‘わんりい’ TEL/FAX：042-734-5100

‘わんりい’掲載原稿募集

‘わんりい’は、会の皆さんで作る会報です。会の活動趣旨に添う原稿やイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思っておりますが、ページ数の都合で遅れることや若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。

また、会報へのご感想などもお待ちしております。

* 問合せ：‘わんりい’事務局へ

YAPAHUWA (ヤーパフワ) 遺跡

皆さん、スリランカのヤーパフワ遺跡という名前を聞いた事がありますか。

スリランカ中央部のクルネガラと西海岸部のブッタランの中間あたりにある、マーホという小さな町の近郊にあります。車を使うとコロンボから120kmぐらいですが道路事情が悪いので3、4時間かかる事を覚悟しなくてはなりません。ガイドブックには載ってはいませんが、世界遺産として有名な文化の三角地帯からは外れた場所である事と、周辺に有名な遺跡が無く観光周遊コースから外れている為に、実際に行った事がある観光客は少ないと思います。コロンボに住んでいる日本人はもとより、スリランカ人の友人達ですら行った事がある人は稀な場所です。

ヤーパフワを有名にしている物は何かと云うと、第一にスリランカの10ルピー札があげられます。お札の裏にはある動物の石像が印刷されています。これがヤーパフワ遺跡の中心である石段の中腹にある「ヤーパフワのライオン」と呼ばれる有名な石像です。もっとも私にはライオンというよりも狛犬に見えますが、石段の脇にはキャンディダンスの原形ではないかと云われているダンスシーンが彫られたレリーフがあります。遺跡の装飾は南インドとカンボジアの建築様式の影響を受けていると云われるユニークなもので、13世紀に僅か12年間ではありますがシンハラ王国の王宮がヤーパフワに設置されていた当時の、仏教を通じた他国との交流を偲ぶ事が出来ます。

今回私がヤーパフワを紹介したいのは遺跡だけではありません。私がスリランカで一番好きな場所であるヤーパフワロックと呼ばれる岩山を紹介したいのです。

遺跡自体も興味深いですが小規模なもので、石段が残されている他には建物の石組みの跡があるだけです。世界遺産のシーギリヤやポロンナルワに比べると見劣りするかもしれません。整備された駐車場もなければ、立派なお土産物屋もありません。あるのは小さな管理事務所、これも小さな博物館、売店ぐらいです。遺跡前の原っぱは近所の子供達の遊び場になっていて、元気な子供達と一緒に遊べます。もちろん、お土産売りに付き纏われる事なんてありません。数人のお坊さんが遺跡を守っています。

お坊さん達も暇とみえ、話しかえれば気軽に応じてくれて、博物館の案内をしてくれたり、紅茶を振舞ってくれたりします。他にはいつでも暇そうな売店のおじさん

がいるだけですが、遺跡の裏には有名なシーギリヤロックと同じ様にヤーパフワロックがあります。

スケジュールに余裕があり、ヤーパフワに行く機会あったら是非とも岩山の頂上に登って下さい。頂上には王宮の建物があつた跡を物語る穴が数箇所と崩れかけたダーガバ(仏舎利塔)が在るだけですが、周囲を眺め回すと多少の近代的な構造物が視野に入るものの、この遺跡が出来た当時、或いはもっと前からあつたであろう景色を見る事ができます。

ココナツツリー林の間には集落があり、田んぼでは水牛がのんびりと草をはんでいます。周囲にある低い岩山の頂上には白いダーガバが日を浴びて光って見えます。天気がよければずっと向こうにシーギリヤロックも見えます。他にもこの様な景色を見る事ができる遺跡、観光地はありますが、ここではよっぽど運が悪くない限り、この景色を好きな時間だけ独占できます。私はのんびりしたくなるとこの場所に行きましたが、1度日本人のお坊さんに出会った事があるだけで、近所の人達以外に観光客が登ってくる姿を見た事はありませんでした。腰をおろし、風に吹かれてのんびりしながら、昔の人が見たのと同じ風景を好きなだけ見たくありませんか？

岩山へは遺跡を見物しながら石段を登り、ゲートをくぐったら広場を左方向に行きます。ちょっとしたジャングルを抜ければ岩山の下部に出ます。ここからは階段らしき物を利用したり、誰かが刻み付けた窪みを利用したり、斜面を100mほど好き勝手なルートを登ります。ガイドブックには、ガイドが必要だとか、急斜面で危険だとか載っていますが、急斜面の場所は一部だしここには迂回ルートもあるので、しっかりした靴を履き、両手両足を使って慎重に登れば大丈夫です。但し、多少の体力は必要です。私がスリランカにいた当時はかなり太っていた為に、途中で何度も息継ぎの休憩が必要でした。

私の個人的な気持ちですが、一日かけてここだけの為に出かけるだけの価値のある眺めと遺跡だと思います。特にリピーターの方にお勧めです。

スリランカに初めて行かれる方は、ヤーパフワは後回しにしてシーギリヤ、ポロンナルワなどのスリランカを代表する遺跡をご覧になった方が良いでしょう。限られた日程の中で行っても、本当に周囲には何もありません。最初はスリランカ各地を出来るだけたくさん見てもらいと思います。その上で、スリランカを好きになって頂けたら次回は是非ヤーパフワにお出かけください。

なぜ私財を投じて

—明日の中国の人的資源の育成を目指した、日本の地方実業家・西村勝一氏を偲ぶ—

吉川 照章

埼玉県秩父市に、日中友好に心血を注ぎ、99歳で生涯を閉じた西村勝一氏という人物がいる。

氏は、1907年、埼玉県秩父市で手広く織物業を営む地元の名家久喜家の三男として生まれた。早稲田大学在学中より、戦前の共産党の非合法の活動を行い、1932年、活動資金調達のため川崎第百銀行大森支店を襲撃し逮捕され、懲役12年の判決を受け、小菅刑務所で服役した。1944年出所後、地元の秩父市に戻り、地域の活性化と幸福のために有益に生きることを決意、石灰、石材、石油、山砂利などを扱う碎石会社の社長として、秩父地域の振興に努めた。

1975年、自社の社長を退職後、長年の念願であった夢の実現のために度々訪中し、人脈を広げると共に、中国の日本語熱の高まりと日本語教材の不足を知り、日本の若者と教科書を送る計画を練り、学校・教育委員会・社会教育団体・宗教関係・西村氏関連の石材会社や織物会社との協力体制を築いて100万冊の教材を送った。

1980年秩父市日中友好推進協会を設立し、会長に就任。既に80歳になっていたが、これ以後は本格的な日中友好事業を展開し、秩父市と山西省臨汾市との友好都市関係を締結、両市民の相互訪問と両国語の学習を推進した。更に山西省が中国有数の、石炭・鉄鉱石・石灰石の地下資源に恵まれていることに着目し、日本のノウ・ハウを駆使した殖産と興業の推奨を唱え、明

日の中国の礎を築く若者の育成を目的に、西村氏による全面的な経済的負担と関係者のサポートにより、校舎・宿泊施設・食堂及び生活全般にいたる中国就学生の教育施設「荒川村国際学院」を開設。1989年に12名が、1990年には17名が入校した。全て受け入れ側の全面負担での中国留学生たちである。起業と産業の振興で築いたかなりの財産の殆どがこれら就学生の受け入れに充てられたといわれる。

「西村さんは、なぜここまでするの?」の声に、「私は息子達に財産を残さない」という。親達の前借金の代わりに織物工場に預けられた若い女工たちの哀れな身の上に触発され、貧しい人々の解放に情熱を傾けた若き日の西村氏の熱い血が、老いても尚冷えることなく、西村氏の身体を巡っていたに違いない。

中国・臨汾市に於いては、1988年臨汾市名誉市民。1997年「臨汾国際西村友好会館」が完成され、2001年臨汾眼科病院に4万ドルを寄付した。2006年7月26日逝去。享年99歳であった。西村氏を慕うかつての就学生、臨汾市民、山西省の多数の方々から弔電が届いた。合掌。



わんりいの皆様、

私たち・TOKYO万馬馬頭琴アンサンブルは、8月13日に馬頭琴の本場、内モンゴルでコンサートを行いました。観客は、中国馬頭琴学会会長で国家一級馬頭琴奏者であるチ・ボラグ先生を始め、内蒙古歌舞劇団の馬頭琴奏者などを中心に百数十名の専門家の皆様たちに聴

いて頂きました。幸いにも大変よい評価を得ることができました。

遅ればせになりましたが、わんりいの皆様に当日のパフレットを添えてひと言、報告申し上げます。また、今後とも応援くださいますようお願いいたします。なお、来年1月14日、中野区で凱旋コンサートを行うことが決まりました。有難うございました。

TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル 永瀬征博

楽団員

西柳美奈子 30歳 全職主婦	特別感謝 中国馬頭琴學會
高木和道 35歳 会社員	
永瀬征博 40歳 会社員	
大江千晶 24歳 大学生	
大内雅彦 45歳 馬頭琴手	
池谷積俊 25歳 料理師	
土谷幹雄 54歳 公務員	
依佐和子 55歳 小琴教師	
依佐水良 28歳 日語教師	
附 風 30歳 鋼琴演奏家	

2006 TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブル 2006 開催演奏

楽団員 紹介

演奏 曲目

専任教員 TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル 2006年8月13日 内モンゴル自治区文化演出団

2006年8月13日

〈2006 夢広場〉で世界の味を!

その他、催しいろいろ!!

2006年11月4日(土) 10:00 ~ 16:00

於: 町田まちの駅「ぼっぼ町田」イベント広場

●「夢広場」は町田市内外で国際支援と友好活動を進めている団体が、世界各地の素晴らしい文化を紹介するとともに平和と共生のアピールを目的にしたお祭です。

●今年の夢広場は特に、**世界の味**にこだわりました。アフリカ・韓国・スリランカ・中国・ネパール・ブラジルなどさまざまな国の味を味わってみませんか? 参加団体の皆さんは腕によりを掛けて皆さんのお出掛けを待っています。

●ステージでは、例年通り楽しいパフォーマンスが上演されます。

▶ 10:00 開会宣言 続いて、手話ダンスサークルまほうの手 TOKYO 万場馬頭琴アンサンブル演奏 バイオリンの演奏 フラダンス 等々と続きます。

●'わんりい'は久しぶりに、香りと味が大好評の新疆風味の炭火焼焼鶏を販売します。ほっぺが落ちる焼鶏と一緒に中国(青島ビール)・インドネシア(ビンタン)・シンガポール(タイガー)・タイ(シンハビール)も販売します。

今年は恒例のバーベキューが出来ませんでしたから、その代わりに「夢広場」で炭火焼焼鶏とアジアのビールで交流できたら嬉しいです。

ビールは、'わんりい'のほかにもアフリカンコネクションがアフリカのビールを、スリランカ日本武道協会がスリランカのビールを販売予定とのこと。お出掛けの時は、是非、電車でいらっしゃってください。

●「陝北紀実」「陝北女娃」で馴染みの中国の版画家・周路さんの版画を展示。

▶ 11月3日(祭) ~ 5日(日)は夢広場本会場近くの街かどギャラリーで、夢広場関連事業として「町田ゆかりの現代中国人画家・四人展」が開催され、周路さんの黄土高原への想いが込められた木版画が多数展示されます。

この展覧会では、'わんりい'とも関わりが深い満柏さん(中国画)と奥さんの叶霖さん(イラスト)、及び楊曉閩さん(モダンアート)の皆さんの作品が展示され、展示点数50点になる充実の展覧会

です。

●ギャラリー 2Fでは、地域の環境美化と保全に格闘の「境川クリーンアップ作戦実行委員会」提供の写真を展示します。ここでは、夢広場スタンプラリーのご褒美が出来ます。何が頂けるでしょうか。乞う!ご期待!!

●折ってすぐ遊べる折り紙を楽しんでみませんか?

日本折り紙協会会員の小林慶子さんが、折って遊べる折り紙の指導をくださいます。小さい人でも折れて、遊べます。次回の外国旅行は是非、折り紙持参で、現地の子供たちと楽しんでみましょう。



2003年あさお市での焼鶏販売風景

Liu Wei Violin 20th Anniversary Recital

素性に独自の地歩を築き 博士の学位を取得するに至った日本人の持たない流麗な叙情性と輝き!

浜離宮朝日ホール
2006.11.30(木)



劉薇
ヴァイオリンリサイタル
来日二十年記念
新たなスタートに向けて

19:00開演(18:30開場)全席自由席 4000円

馬思聰作品: ピアノ五重奏(日本初演)/第一回旋曲/喇嘛寺院/山歌 助川敏弥作品: ヴァイオリンとピアノのための「竜舌蘭」/遠い雨/劉薇さんのために(初演) フランク作品: ヴァイオリンソナタ 長調

主催: 劉薇後援会

問合せ: TEL/FAX: 03-3789-6518

ホールと交通の案内: 都営地下鉄・大江戸線「築地市場」A2出口徒歩3分 朝日新聞社新館2F

チケット: 朝日ホール・チケットセンター 03-3267-9990 他

'わんりい'11月定例会: 11月14日(火)

おたより発送: 11月28日(火) 共に田井宅13:30~